論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報告番号	博(医歯薬)甲第 899 号	氏名	井上　悠介

学 位 審 査 委 員		
	主　査	林田　直美
	副　査	酒井　英樹
	副　査	中尾　一彦

論文審査の結果の要旨

１　研究目的の評価

本研究は、全肝移植後に発症することが知られている急性腎障害（AKI）と慢性腎障害（CKD）に着目し、生体肝移植術（LDLT）後の AKI は CKD のリスクとなり得るという仮説のもと、LDLT 後の AKI、CKD、及び予後との関連を明らかにしようとしたもので、目的は十分に妥当である。

２　研究手法に関する評価

2005 年 4 月から 2012 年 12 月までに LDLT を施行した成人 118 人を対象として、AKI および CKD の定義を簡略化して用い、性別、ドナー年齢、レシピエント年齢、MELD スコア、グラフト/標準肝容積比、等の種々の予後因子との関連について多変量解析を用いて解析したもので、研究手法も妥当である。

３　解析・考察の評価

上記手法で解析した結果、AKI と CKD には関連を認めず、術中出血量が 5000ml 以上の症例は AKI1（術後 7 日間の血清クレアチニンが 0.5mg/dL 以上）と関連することを明らかにした。これらの結果から、AKI を発症しても適切な管理により CKD への発展を予防できること、また、厳密な水分バランス管理による血流の保持により腎機能悪化を防ぎ得ることが示唆された。

以上のように本論文は生体肝移植後の予後の研究に貢献するところが大であり、審査委員は全員一致で博士（医学）の学位に値するものと判断した。